



TITLE:

# 感情比喩の理解と産出の特性( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

岡, 隆之介

---

CITATION:

岡, 隆之介. 感情比喩の理解と産出の特性. 京都大学, 2018, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20848>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（教育学）	氏名	岡 隆之介
論文題目	感情比喩の理解と産出の特性		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、感情を表した比喩表現（以下、感情比喩と呼ぶ）の理解と産出の特性について心理学実験に基づいて解明した認知科学研究である。論文は 6 章、7 つの研究から構成されている。</p> <p>第 1 章「序論」では、研究の主題である比喩表現と感情の定義を行った。そして、これまでの比喩研究は、処理過程を重視していたのに対し、本研究は、比喩の機能を重視するとしている。さらに、本研究の目的が、感情を表した比喩表現の理解と産出特性について明らかにすることで、比喩表現の機能的な意義について実証的に検討することであると述べている。</p> <p>第 2 章「感情比喩の理解と産出の特性に関する研究背景」では、先行研究のレビューを行い、感情比喩に関する理解と産出の特性についての知見を整理し、残された課題を明らかにしている。とくに、感情比喩の実証的な研究に焦点を当てて、本論文の課題を明確化している。</p> <p>第 3 章「感情比喩の産出特性：説明対象の影響」では、比喩表現の産出において、説明対象の違いが比喩表現の産出に要する心的負荷(コスト)に与える影響を検討している。研究 1 では、23 名の大学生を参加者として、過去の感情的体験に関わる行動と感情を、比喩表現と字義表現を用いて産出させた。その結果、比喩表現を用いて説明するときには、行動よりも気持ちのほうの説明にかかる時間が短いことを明らかにした。研究 2 では、41 名の大学生に対して、形式を固定して表現を産出させた実験において同様の結果を見いだしている。</p> <p>第 4 章「感情比喩の理解特性：説明対象の影響」では、感情経験を表現した比喩表現と字義表現の理解における差異を、感情の強度評価と感情種類の判別精度の両面で検討している。研究 3 と研究 4 のあわせて 78 名の大学生参加者に、それぞれ研究 1 と研究 2 で収集した感情の比喩文と字義文について、表現が表す感情を Affect Grid 法によって回答させた。その結果、読み手は感情比喩によって、感情字義文と同程度に正確に感情の強度評価と種類判別ができると考察している。</p> <p>第 5 章「感情比喩の産出と理解特性：話し手の想定する聞き手の影響」では、話し手が想定する聞き手の当事者性が、話し手の感情比喩の産出と、読み手による感情比喩に対する感情強度と配慮の程度の評価に及ぼす影響を検討している。研究 5 では、119 名の大学生が、聞き手がネガティブ感情の当事者-非当事者である場合のそれぞれの条件について、退屈な授業とまずかった食べ物について比喩表現を作成した。その結果、聞き手の当事者性の条件ごとに固有な比喩表現を産出していた。研究 6 では 24 人の大学生に、研究 5 で収集した感情比喩の強度を評価させ、研究 7 では 167 名の大学生に配慮の程度を評定させた。その結果、聞き手が当事者であることを想定した感情比喩は非当事者を想定した感情比喩に比べて、ネガティブな感情強度評価が低く、配慮が高く評価されたとしている。</p>			

第6章「総合考察」では、一連の実験による成果に基づいて、感情比喩の産出と理解の特性について議論している。そして、感情比喩の産出特性として、(1)気持ちのような抽象的内容の表現の産出に要するコストが低いことと、(2)ネガティブな感情の当事者に対する感情比喩は、聞き手に対する配慮の結果として、強度が弱い比喩が産出されること、感情比喩の理解特性として、(3)比喩表現は字義表現と同程度の判別精度で感情の種類情報を伝えることと、(4)感情強度の評価段階では、配慮の程度の評価も関連することを論じている。そして、今後の課題と展望について述べている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、感情比喩の理解と産出における特性を解明するために、7つの実験を用いた研究を行い、実験データに基づいて、感情比喩の産出と理解に及ぼす規定要因を検討し、比喩の機能について多面的に論じたものである。

本論文の特色は以下の3点である。

1. 比喩研究に関する広範な理論的検討を土台にして、(a)比喩の機能的意義について、理解だけでなく産出にも注目して、感情比喩を用いて実験研究を行い、(b)話し手の産出-聞き手の理解に及ぼす要因(説明対象、当時者性)を多面的に検討し、(c)感情比喩の伝達における有効性を、表現の産出しやすさや伝達内容から解明したことにより、比喩の認知科学研究に学術的なインパクトをもつ点
2. 比喩の産出と理解を解明するために、(a) 実験参加者が産出した比喩を材料に用いて、理解実験を行い、産出と理解を統合的に扱う方法を考案した点、(b)比喩表現-字義表現の産出しやすさを、時間、語数、評定で直接測定する実験システムなどを開発した点において、方法論上の新しさをもつ点
3. 比喩の機能的意義に関する実証的な研究として、日常生活のコミュニケーションの解明やユーザインタフェースのデザインに多くの示唆をもつ点

第1章では、研究の背景として、日常生活における感情比喩の重要性を述べた上で、これまでの比喩研究が処理過程を重視し、とくに理解過程研究が多いことを指摘している。その上で、感情比喩の機能に着目し、その理解とともに産出を取り上げる重要性を主張した点に、本研究の着眼点の鋭さがある。

第2章では、これまでの認知科学における比喩研究を広範に検討し、比喩研究の意義と比喩の理解・産出に関わる先行研究の成果と理論を的確に整理した上で、本論文の感情比喩の研究の課題と研究の枠組みを明確に示している。

第3章では、研究1と研究2において、感情に関する比喩表現と字義表現の産出コストを比較するために、実験プログラムを開発し、産出時間、文字数、困難度評価を測定している。そして、感情比喩は字義表現よりも産出時間はかかるが、簡潔に表現できること、気持ちは行動よりも表現するための産出時間が短いことを示している。これは、比喩産出における簡潔性仮説と心的負荷を実証した点で、学術的、方法論的意義は大きい。

第4章では、感情経験に関する比喩表現と字義表現の理解特性の差異を、Affect Grid法に基づいて計量的に検討している。研究1, 2で産出された720文を材料にして、研究3, 4の実験を行い、比喩表現が字義表現と同程度の強度評価と判別精度であることを示している。これは、比喩が字義表現と同程度の伝達効率が得られることを示した点で、学術的に新たな成果である。

第5章では、話し手の想定する聞き手の当事者性の影響を検討するために、研究5では、参加者に、聞き手が当事者であることを想定して感情比喩を産出させ、それらを比喩材料に用いて、研究6では感情強度を、研究7では配慮の程度を評価させるという方法を用いている。そして、話し手が聞き手を当事者であると想定した感情比喩に対しては、読み手によるネガティブ感情強度評価が低下し、このことが、配慮表現と認知されることを見いだしている。これは、比喩の婉曲表現としての機能を見いだした点で、新たな発見である。さらに、これらの結果を、ポライトネス理論の枠組みで説明し理論を拡張した点で、理論面でのインパクトをもつ成果である。

第6章「総合考察」では、一連の実験による成果に基づいて、感情比喩の理解と産出特性について議論している。そして、本論文が、(a)話し手の感情比喩の産出に影響を与える要因として、説明対象や、会話者間の関係性(当事者性)に焦点を当てて、多面的に

示した点、(b)比喩表現の産出コストや伝達される感情強度の点から、感情比喩の主観的体験の伝達における有効性を示唆した点は、認知科学における比喩研究として学術的に重要な成果である。

以上のように本論文は、感情比喩の理解と産出における特性を解明するために、心理学および言語学の幅広い研究についての理論的検討を土台として、実験手法を工夫した上で、多くの比喩産出データを用いて実験室実験を積み重ねて、考察を深め、統合的枠組みを提起している。これらは、学術面と方法面で多くの新たな成果をあげている。今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

1. 比喩の産出-理解の機能的側面、比喩のもつ全体性を踏まえて、研究成果を統合する理論の必要性
2. 比喩表現の産出側-理解側における字義表現を越える効果の検討、比喩産出の認知的コストの背後にある認知過程の分析
3. Affective Grid 法で捉えられない感情比喩の意味の解明、感情比喩以外の比喩（技能伝承における比喩など）、シンタックスとの関係の検討
4. ユーザビリティ評価、人-ロボット・機械のコミュニケーションなどにおける活用などの実問題の解決に役立てるための、さらなる議論の必要性

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 30 年 2 月 2 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。さらに、デザイン学大学院の付記部分についての試問も行った。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 平成      年      月      日以降